

## (第十一章)

プトガラ（人）が本性として有る理由を否定する＞論証する理由を否定する＞生死の行為が有る理由を否定する＞

[章の著述を説く]

言う。「我は有るのみである。何故かといえ、輪廻が有る故であり、これについて世尊は

『聖なる法を全く知らぬ、幼子にとって輪廻は長い。』

と説かれた。その如く、

『比丘達よ。然れば、君の輪廻を滅尽する為に、慎重にそのように学びたまえ。』

とも説かれた。それ故に、それを長いと示し、滅尽する為に慎重にせよと示された、その輪廻は有る。無いとすれば、如何様に長く、そして滅尽するとなろうか。そう見るので、長く、滅尽すると説かれたので、輪廻は有る。輪廻があれば、輪廻する者も有ると顕かである。何故かといえ、来来再再そこへ行くので『輪廻』という故であり、来て、来て、行くそれが、我である。それ故に、我は有るのみである。」

章の著述を説く＞輪廻が本性として有ることを否定する＞[輪廻において、始まりと終わりと中間の部分否定する]

説く。何？君は、蜂蜜は見えるが、絶壁は見えないのか？君は、輪廻が長いことや滅尽すると説かれたことを見るが、何故ならば、世尊が説かれた、この他の言葉を見ていない。

前の果ては顕かであるかと問うた時、

偉大なる成就者は、「そうではない。」と説かれた。

輪廻は始まりと終わりが無く、

それに前は無く、後は無い。 1

世尊、一切智、一切観、大成就者が、

「比丘達よ。輪廻に始まりと終わりは無い。前（始まり）の果ては顕かではない。」

と御言葉を賜れたので、それ故に、始まりと終わりは無いと説かれたことによって、世尊が輪廻も自性が欠如すると示された。このように、もし「輪廻者」という何らかの事物が有るとなれば、それには始まりも有り、終わりも有るとなることに疑いは無い。このように、存在する事物に始まりが無く終わりが無いと、如何様になろうか。然れば、世間の名称に従って「輪廻は長い」や「滅尽する」と説かれたが、世尊は勝義が示されるに準じて、「それに前は無く、後

は無い。」と説かれた。そう見れば、始まりと終わりは無いと説かれたので、「輪廻」という事物は何ものも不合理である。それが無ければ、どのような輪廻者が合理となろうか。

言う。「そのように、輪廻の始まりと終わりを既に否定したとしようが、中間を否定していないので、それが有る輪廻とは有るのみである。このように、無事物に中間が有ると如何様になろうか。そう見るので、中間が有る故に、輪廻は有るのみである。輪廻が有る故に、輪廻する者も有るのみである。」

説く。もし、中間そのものが有るとなれば、中間が有る故に輪廻も有るとなるが、その中間そのものが不合理であるので、それが有る故に輪廻が有ると何処でなろうか。

始まりと終わりが無いもの。  
それに、中間が何処に有ろうか。

始まりと終わりが無いそれに、中間が有ると如何様になろうか。このように、始まりと終わりに相互関係して中間が成立するとなるのであるが、それに始まりと終わりも無く、それが無い故に、その中間が有ると何処でなろうか。

阿闍梨聖提婆も、

「始まりと中と終わりが無ければ、生の以前はあり得ない。二つずつに関わらず、それぞれが始めると、如何様になろうか。」<sup>1</sup>

と説かれた。

輪廻が本性として有ることを否定する>生死において、前後時と同時（一緒）を否定する> [要約して示す]

それ故に、それに前後か、  
一緒である順序は不合理である。 2

それ故に、それに前後と一緒（同時）の順序はあり得ない。そのように、何故ならば、輪廻に始まりと中間と終わりが無い故に、ここに輪廻者の生や老死においても前後、一緒（同時）の順序は無い。

<sup>1</sup> 「始まり…なろうか。」:『四百論』第 15 章 5 偈。

「始まりと中間と終わりは、生の以前にあり得ない。二つずつが無くして、如何様にそれぞれが開始するとなろうか。(パツァブ訳)」

生死において、前後時と同時（一緒）を否定する＞詳細に説く＞前後時制を否定する＞[生が前であることを否定する]

それらは如何様にといえば、

もし、生が前となり、  
老死が後であるならば、  
生には老死が無く、  
死んでおらずとも生まれることになる。 3

もし生が前となり、その下で後に老死においても前後して起こるならば、そう見れば、その生に老死が無くなるだろう。それに老死が無くなれば、後に老死が何処から来るとなろうか。もし来るならば、老死は拠所が無い背理となるだろう。それと接したとしても、それにおいて如何とも変化しない。（何故ならば）自性として老死が無い故である。

また他にも、死なずとも生まれることになり、このように、生が前であると考察したならば、それは以前に他で死んでおらずに、ここに生まれる背理となるだろう。そう見れば、輪廻は始まりを具えることとなり、それも主張しないので、それ故に、生が前であり老死が後であるとは不合理である。

前後時制を否定する＞[老死が前であることを否定する]

『何、その過失となつてはいけない。』と思い「老死は以前（にある）のみであり、生が後である。」といえ。

それに対して説こう。

もし、生が後となり、  
老死が前であるならば、  
生の無い老死は、  
無因であると、如何様になろうか。 4

もし、その老死が前となり、生が後であるとなれば、そう見れば拠所の無い老死は無因である背理となるので、それも主張しない。このように、生じておらず、存在しない老死は拠所が無く、因無くして如何様に起こるとなろうか。生じて存在するものには、老死が示されるに適正である。そう見るので、生が後であり老死が前でも不合理である。

詳細に説く> [同時を否定する]

言う。「それらに前後は無く、それは老死に関係しつつあるのみにおいて生じる。」

説く。

生と老死は、  
一緒であるとは適わない。

生と老死は、まさしく一緒になることは不合理である。もしなるならば、

生じつつあるものが死ぬこととなり、  
双方とも無因を持つものになるだろう。 5

もし、生と老死がまさしく一緒になれば、そう見ればまさしく生じつつある時に死ぬことになるので、それも不合理であり、このように生と滅の合致しない二つずつが、一所に同一時に、如何様に起こるとなろうか。

また他にも、双方とも無因を持つものとなる。もし、生と老死がまさしく一緒に起こるとなれば、その生は死が先行するのではなく、その生が前である背理になるだろう。生が前となれば、無因を持つものである背理となり、阿闍梨聖無畏によっても、

「もし、業より身体が生じるが、身体に結ばれずに業が無ければ、前に身体は業より生じていない。如何なる因によって生じたのか。」

と説かれた。

そのように一緒に生じれば、その老死は生に相互関係せず自らより良く成立し、老死には拠所が無く、無因を持つものになる背理となるので、それも主張しない。(何故ならば) 多くの過失をもつ背理となる故である。そう見るので、生と老死は一緒であるとも不合理である。

生死において、前後時と同時(一緒)を否定する> [まとめ]

それ故に、そのようにここで君が考察した輪廻に、生と老死の前後と一緒(同時)の順序はあり得ない。それが無ければ、生と老死の無い「我」という何であろうとも、輪廻することになるそれは何であるか。

言う。「それらに前後と一緒(同時)の順序等が有ろうと無かろうと構わぬ。存在するなら、生と老死は先ず有る。それらも、基体が無いものではないので、

何かだけが所有するものであり、その何かまさしく有るものが我であるので、我は有るのみである。」

説く。

それに、前後と一緒という  
それらの順序があり得ない、  
その生とその老死を、  
何故に概念化するのか。 6

そのように、正理を先行して考察したならば、生であるものと老死であるものに前後と一緒（同時）の順序があり得ず、無いそれに対して、君は「生はそれであり、老死はそれである。」と、何故に概念化し、述べるのか。

もし、生か老死の何かが有るとなれば、それは前か、後か、一緒（同時）になると確かであるが、「生と老死は有る。」というそれらに前後と一緒（同時）の順序は無いので、本性として留まると、誰がその言葉を述べようか。思惟と共にある誰が心に抱こうか。

そう見るので、生と老死は不合理である。それが無ければ、我が有ると、如何様に合理となろうか。それ故に、我（が存在する）と言い、正理に反したそれを手放したまえ。

章の著述を説く > [その正理を他にも適用する]

因果そのものや、  
性相と事相そのものや、  
感受作用と感受者そのものや、  
意味のある何ものでもよいが、 7

斯様に考察したならば、生と老死の、前後や一緒（同時）の順序は不合理であるが如く、因果や、性相と性相の拠所（事相）や、感受作用と感受者や、他の如何なる意味でもよいが、解脱と涅槃や、知と所知や、量と所量等、存在すると考察されたそれら一切においても、前後と一緒（同時）の順序は不合理である。

如何様にといえば。

先ずもし、果が前となり因が後となれば、そう見れば果は無因を持つものとなるだろう。果が有るとしても、因が何をしようか。因であると考察したことが、まさしく無意味ともなる背理となるだろう。

もし因が前となり果が後になったとしても、因は無果を持つものとなるので、それも不合理であり、このように、果が無ければ如何様に因となろうか。もしなるならば、そう見れば、因ではないと何ものもなくなるだろう。

もし因と果が一緒となれば、そう見てもまさしくその過失となり、双方とも無因を持つものとなることと、果に相互関係しないのみにおいて自らより良く成立したとなるので、それも不合理である。

その如く、もし性相が前となり性相の拠所（事相）が後となれば、そう見ても性相の拠所（事相）が生じていなければ、何の性相となろうか。これによって定義するので「性相」というのであるが、これによって定義される性相の拠所（事相）であるものも、生じていないので無い。それが無ければ、定義しないそれが如何様に性相となろうか。

もしまた、性相の拠所（事相）が前となり、性相が後となれば、そう見ても性相の拠所（事相）は無定義を持つものである背理となるので、それも不合理である。このように、性相の無い事物が如何様に有るとなろうか。もし（有ると）なれば、兎の角等も有るとなるだろう。

性相であると考察されることもまさしく無意味ともなる。性相の拠所（事相）が良く成立する故に性相であると主張するのであれば、それは、もしその性相がまさしく無くとも性相の拠所（事相）が成立したならば、それに対しても性相が何をしようか。

もしまた、性相と性相の拠所（事相）が一緒となるならば、そう見るとしても、まさしくその過失となる。双方ともまさしく無因を持つものとなり、性相の拠所（事相）も性相に相互関係しないのみにおいて自らより良く成立したとなるので、それも不合理である。

その如く、もし感受者が前となり、感受作用が後となれば、そう見るとしても感受作用が無く、生じていなければ、それは何の感受者となろうか。感受をするので感受者であるけれど、まさしくその感受作用は生じておらず、それが無ければ、それが何を感受しようか。感受しなければ、如何様に感受者となろうか。もしなるならば、一切も一切の苦楽と接しておらずに感受者となるので、それも不合理である。

もしまた、感受作用が前となり、感受者が後となれば、そう見ても、（感受者が）感受しないながら感受作用となるのでそれも不合理である。このように、（感受者が）感受することをしないものが如何様に感受作用となろうか。もしなるならば、何ものも、如何なる時にも、何処でも、感受作用と離れるとはなら

ないので、それも主張しない。

もしまた、感受作用と感受者がまさしく一緒であると考えれば、そう見ても、まさしくその過失となる。双方とも無因を持つものとなり、感受者は感受作用に相互関係しないのみにおいて、感受しないながら自らより良く成立したとなり、感受作用も感受者に相互関係しないのみにおいて、誰も感受することをしないながら自らより良く成立したとなるので、それも不合理である。

その如く、解脱より涅槃が前となれば、全くの煩惱と共にあるものも涅槃を得るとなり、そう見れば、誰も涅槃を得ていないとはならないので、それも不合理である。もし、解脱より涅槃が後であれば、まさしく涅槃を得なくとも解脱を得ることになる。そう見ても、涅槃を得ていない一切の者が解脱することになり、解脱してから後に涅槃を得ることは、まさしく無意味にもなるだろう。

「涅槃とは、生じておらず、起こっていない」とは、以前に起こっておらず後に起こるとなれば、生を持つものと等しくもなるので、それも主張しない。

もしまた、解脱と涅槃の二つがまさしく一緒ともなれば、そう見てもまさしくその過失となる。双方ともまさしく無因を持つものとなり、解脱は涅槃に相互関係しないのみにおいて自らより良く成立したとなり、涅槃も解脱に相互関係しないのみにおいて自らより良く成立したとなるので、それも不合理である。

知と所知や量と所量等についても、その如く視たまえ。

輪廻のみに、前の果てが  
有るのではないだけでなく、  
まさしく一切の諸事物においても、  
前の果ては有るのではない。 8

何故ならば、そのように、清浄をあるがままに考察したならば、一切の事物において前後と一緒（同時）の順序は不合理である故に、輪廻のみに前の果てが有るのではないだけではなく、事物であると主張する一切にも前の果ては有るのではない。従って事物としての現れは、幻や、逃げ水や、尋香の都や、映像の如くであると成立した。

生死の行為が有る理由を否定する > [章の名を示す]

「輪廻を考察する」という第十一章である。